

フィン付き熱交換器における問題点

熱交換器は、熱を吸収しやすいように表面積が大きいのが特徴です。水-水熱交換器のような場合は、熱交換部分を内部に持っているのに対し、気-液熱交換器でフィン付き熱交換器のような場合は、外部に熱交換部分を持っています。この結果、フィン付き熱交換器を漏れ検査する場合には、周囲空気の流れに注意する必要があります。コルゲート管を用いた、フィン無しの熱交換器でも同様です。

計測中の周囲空気の流れが無い場合：

ワークに残熱が有る場合（放熱中のワークを漏れ検査する場合）でも、温度補正機能があれば、影響温度を把握して補正するので、正確な漏れの測定が可能です。詳細は「温度補正機能」「温度補正技術」をご参照ください。

計測中の周囲空気に流れがある場合：

マスターとワークを、となりに並べたとしても、冷暖房風の風が同時に、かつ、均等に当たることは有りません。しかも、影響温度を把握中と漏れ測定中で、同じ影響が続いていることは皆無です。エアリークテスターによる風の影響測定は、弊社のエアリークテスターでなくても測定可能です。測定方法、内圧変化[Pa]から風の影響（影響温度）を求める計算式等は、関連の技術資料「遮風技術」をご覧ください。